

研究・調査報告書

報告書番号	担当
569	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Quantifying alcohol-related mortality: should alcohol-related contributory causes of death be included? アルコール関連死亡統計の定量評価：アルコールに起因する死がいかにあるべきか	
執筆者	
Durkin A, Connolly S, O'Reilly D	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Alcohol. 2010 Jul-Aug;45(4):374-8. Epub 2010 May 13	
キーワード	
アルコール、死亡統計、死因、疫学	
要 旨	
目的： イギリスにおけるアルコールに関連する死亡統計が、直接死因と同じく間接死因まで含まれるべきかを評価するものである。	
方法： 2001 から 2007 年に北アイルランドで登録された延べ 101,320 件の死亡登録について、直接または間接にアルコールに関連する死亡登録を量的に質的に決定するために研究した。	
結果： 1,690 件(全死亡の 1.7%)の死亡登録がアルコールによる直接死因であり、さらに 1,105 件の間接死因があった。この研究から、アルコールに関係する間接死因を追加すると、男女比を増加させ、社会経済的な連続性を生じることとなり、見かけのアルコール関係の死亡率を増やすことになるだろう。事故や自殺などのアルコールに起因する外因による明らかな間接死因は、尚更明らかであった。	
結論： 直接死因を用いるのみでは疑いなくアルコールの社会的負荷を過小評価するだろうし、アルコール関連の死に最もさいなまれることになる特に若年男性において不正確な像を与えることになるだろう。	